

聖書：使徒 21：17～40

説教題：エルサレムに着くと

日時：2014年7月13日

いよいよパウロはエルサレムに着きます。これまでこの町に近づくごとに、大変な苦難が待ち受けていると警告されて来ました。前回のカイザリヤでは預言者アガボが下って来て、自分の両手両足をパウロの帯で縛り、「この帯の持ち主は、エルサレムでユダヤ人に、こんなふうには縛られ、異邦人の手に渡される。」と予告しました。果たしてエルサレムに到着したパウロはどうだったでしょう。

17 節にあるように、エルサレムに着くと兄弟たちは喜んでパウロの一行を迎えてくれました。その翌日、パウロはヤコブを訪問します。そこには教会の長老たちもみな集まっています。パウロは異邦人宣教の様子を報告します。そして今回のエルサレム訪問の一大目的であったユダヤの教会のための献金も差し出したことでしょう。パウロはこれらを「神が異邦人の間でなさったこと」として報告しました。これに対してエルサレム教会側も「神をほめたたえた」とあります。彼らはパウロたちの報告を喜ばしい報告として受け止めたのです。エルサレム教会のヤコブたちはパウロたちと同じ福音に立っていたのです。

しかし、ここで多くのスペースを割いて記されているのは、彼らが抱いていた懸念についてです。彼ら自身はパウロの存在と働きを喜ばしく思い、感謝していますが、残念ながら皆がそうではないという状況がありました。ヤコブたちが言うところによれば、エルサレムのクリスチャンたちの中には、パウロについての良くない噂が流れているということです。それはパウロが異邦人世界に住むユダヤ人に対して、子どもに割礼を施すな、慣習に従って歩むな、モーセにそむけ！と教えているというものです。これはパウロの主張と違うことはヤコブたちは分かっていました。パウロが伝えていたメッセージは、異邦人は救いのために割礼を受ける必要はない、あるいは律法の行ないをする必要はないというものでした。すなわち救いのためにユダヤ人になる必要はない。人はただイエス・キリストを信じる信仰を通して救われるということです。しかしこのメッセージがユダヤ人の間で誤解されていた。パウロはこれを異邦人に言っていたのですが、ある人々はパウロがユダヤ人にも律法を守るな、割礼を受けるな、と言っていると理解したのです。これではエルサレムに住む律法に熱心な信者たちとの間に大変な摩擦あるいは衝突が起りかねないと心配したのです。

そこで、ヤコブたちは提案します。ここに誓願を立てている者が4人いる。その彼らを連れて、あなたも一緒に身をきよめ、彼らが頭を剃る費用を出してやりなさい。そうすれば、あなたは今も律法を重んじて生活している人であることが皆にも知られることになるだろう、と。パウロはこれを受け入れ、実行します。果たして私たちはこれをどう見るべきでしょうか。ここは注解者によって意見が分かれるところです。ある人たちは、パウロはここで妥協したと見ます。守る必要がない律法を彼はここで守っている。つまりエルサレム教会の圧力に屈してしまった、と。しかしそのようにパウロのミスとしてこの記事を読む必要はないように思います。ナジル人の誓願について言えば、パウロ自身、少し前の箇所で行なっていました(18章18節)。

また割礼について言えば、テモテを伝道旅行に連れて行く時、ユダヤ人の手前、割礼を受けさせました（16章3節）。パウロは異邦人には救いのために律法の行ないをする必要はないと主張しましたが、ユダヤ人には、それが救いの条件とされるのでない限り、彼らに染み付いている文化的表現として、生活様式として行なうことは問題ないとなりました。ですからパウロ自身、神への感謝と献身の表明として、ナジル人の誓願を行ないました。またユダヤ人により良く伝道することができるために、テモテに前もって割礼を受けさせました。ここでも信仰に入ったばかりのユダヤ人をつまずかせないために、あるいはこれから救われるだろうユダヤ人の妨げにならないように、ヤコブの提案を受け入れたのです。もちろん人々との争いを避けるために、罪を犯すことにまで進んでならないのは当然のことです。別に割礼のしるしを身に帯びることは罪ではありません。また誓願を立てることも罪ではありません。パウロはこうして「ユダヤ人にはユダヤ人のように、律法の下にある人々には律法の下にある者のように」なったのです。福音のために、また相手の救いのために、どちらでも良いことなら進んで相手に合わせるパウロのへりくだった、また自由な姿がここに 있습니다。

しかしパウロとヤコブたちのこのような配慮は、人間的には功を奏さなかったようです。27節以降を見ると、パウロたちのしようとしていたことがほとんど終わろうとしていた頃、結局問題が発生してしまいます。アジヤから来たユダヤ人たちが群衆を煽りたててパウロを訴えたのです。彼らはパウロがエペソ人トロピモを、異邦人を連れ込んでではない宮の庭まで連れ込んだと思ひ込みました。パウロがトロピモと町で一緒に歩いているのを見て、宮にも連れ込んだと早合点したのです。これによってパウロに対する反感が一気に彼らの間で爆発します。この結果、パウロは大変な状況に巻き込まれてしまいます。

まず27節に、彼は手をかけられたとあります。そして30節で捕らえられました。また宮の外へ引きずり出されました。そして直ちに宮の門が閉じられます。これは神殿内の騒動の拡大を防ぐためのものです。さらに31節では、人々はパウロを殺そうとしていたとまで記されます。それを知ってローマ軍が介入します。彼らは治安を維持する部隊として宮の監視も行なっていました。彼らは駆け付け、まずは群衆からパウロを引き離し、身柄を確保します。その兵士たちが来たのを見て、ユダヤ人たちはパウロを打つのをやめたと32節にあります。ですからパウロは殺到した人々によって打ちたたかれていたのです。あと少し遅れていたら、命に関わる出来事となっていたでしょう。そしてパウロはローマの千人隊長によって二つの鎖につながれます。罪を犯したわけではないのに、囚われの状態にさせられます。そして千人隊長が群衆に向かってパウロについて尋ねると、人々はめいめい勝手なことを叫び続けました。そこでパウロを兵營に連れて行こうとしましたが、群衆の暴行を避けるため、パウロを担ぎ上げなければならないほどでした。それは大ぜいの群衆が「彼を除け」と叫びながら、ついて来たからです。あまりにも恐ろしい状況です。

こうしてアガボの預言は一気に成就します。パウロは帯によってではありませんでしたが、鎖につながれ、ユダヤ人の手から異邦人の手へと渡されました。なぜこのようなことが起こったのでしょうか。それは一言で言って、パウロが宣伝していた福音のためと言えます。パウロは人は律法の行ないによってではなく、ただイエス・キリストを信じる信仰により、ただ恵

みによって救われると伝えました。すなわちただ信仰のみ、ただキリストのみ、ただ恵みのみの福音です。しかしユダヤ人にとってこれは面白くない。これではユダヤ人も異邦人も同じ人間になってしまいます。自分たちの優位性がなくなってしまいます。また自分たちが一生懸命守っている律法の行ないが勘定に入れられないのも到底受け入れられない。そういう意味でこの二つの立場の衝突は避けられないものだったと言えます。むしろエルサレムでこの二つの立場がぶつかることによって、キリスト教福音の立場が今一度明らかにされなければならなかった。そのためにこのような衝突が起こらざるを得なかったということではないでしょうか。

最後に見たいのは、この状況でパウロはどう振る舞ったかということです。37 節で兵營に連れ込まれようとする、パウロは千人隊長に「一言お話ししても良いでしょうか」と尋ねます。まず彼に分かるようにギリシャ語で話し、許可を取ると、今度はユダヤ人にヘブル語で話し始めます。その内容は次回 22 章で見ます。今日はこのように話し始めるパウロの姿から学びたいと思います。私たちがここに見るのは、パウロの驚くべき勇気ではないでしょうか。彼は怒り狂った群衆からひどい肉体的苦しみを受けたでしょう。また同胞からこのような仕打ちを受けて、精神的・心理的に相当なショックを受けたはずでしょう。こんな状況では、とにかく兵營に連れて行ってもらって、しばらく休ませてもらいたいと私たちなら思うところではないでしょうか。しかしパウロは千人隊長に頼んで、話をさせてくださいと言います。そしてイエス・キリストのことをあかしするのです。

なぜパウロはこのように行動することができたのでしょうか。彼がこのような仕打ちを受けていたのは、キリストの福音を宣べ伝えていたためです。しかしパウロはただ口でキリストの福音を伝える人であっただけではなく、彼自身が福音の力に豊かに生きている人であったということ私たちはここに見るのです。

なぜ彼は怒り狂うユダヤ人を前に、こんな勇気ある行動を取れたのか。それは彼が福音に基づいて神こそがこの状況においても主権者であることを深く確信していたからでしょう。ユダヤ人たちがこの状況の主なのではない。また自分がこの状況の主なのでもない。神こそがこの状況も支配し、ご自身の御心のみを行なわれる。そして彼がこの確信を自分の慰めとして持つことができたのは、何と言ってもイエス・キリストの十字架の福音のゆえでしょう。なぜ聖なる神が、自分を守り、祝福してくださると確信できるのか。それはキリストにあって自分の罪が赦されていることを確信していたからでしょう。自分の行ないによらず、キリストの完全な身代わりと義の生涯のゆえに、神の前に罪赦され、義と見なされている。だから神が私に悪を行なわれるはずはない。ローマ書 8 章 38～39 節：「死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主イエス・キリストにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」もちろんここで死ぬ可能性はあります。しかしそれさえも自分からは何の祝福も奪わない。ピリピ 1 章 21 節：「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」ですからパウロにとって専心すべきことは、いのちの心配をすることではなく、自分に与えられた務めに最後まで励むことのみでした。「けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができたら、私のいのちは

少しも惜しいとは思いません。」(20章24節)この告白通りに生きていたパウロだったのです。

果たして私たちもこの福音の力に生きている者でしょうか。このパウロの姿を見る私たちにとってのチャレンジは、私たちも同じ福音に生かされている者として、このように歩むことができるはずだということです。私たちも突然の困難に投げ入れられる時があるかもしれません。人々からの誤解や中傷、ひどい扱いの嵐の中に置かれることがあるかもしれません。しかしそこで私たちもパウロと同じように心に平安を頂いて取り組むことができるはず。主権者は神。その方のもとで私の幸いを確信できるのは、私たちの罪が御前に赦されていることを確信できる時。その私はたとえ今その状況で死んでも何ら幸いは変わらない。この福音に生かされ、魂の奥深くに深い平安を頂いてこそ、たとえ怒り狂う群衆を前にしても、落ち着いて自分のなすべきことを行なうことができる。私をこの救いへ導いてくださったキリストのために生きることへと集中して行くことができる。私たちはこの福音をしっかり受け止め、日々の戦いの中で自らをこのように支え、生かす神の恵みの福音が、私たちの言葉とともに、私たちの生き方を通して現わされることを求めて歩みたいと思います。ただ信仰のみ、ただキリストのみ、ただ恵みのみの福音こそ、私たちをこのような祝福に生かしてくれるのです。